

ランドスケープシンポジウム 2010 報告書

テーマ

## 円山公園これまでの歩みから将来を考える

—円山公園の変遷から考える公園利用と保全—

日時：平成 22 年 10 月 2 日（土）10：00～17：00

場所：円山公園，円山動物園，北海道神宮参集殿

第 1 部 円山公園見学ミニツアー

第 2 部 「円山公園のこれまでの歩みから将来を考える」シンポジウム

主催：ランドスケープシンポジウム実行委員会

共催：（社）日本造園学会北海道支部，（社）北海道造園緑化建設業協会

（社）ランドスケープコンサルタンツ協会北海道支部

（財）札幌市公園緑化協会

後援：北海道開発局，北海道，札幌市，NPO 法人ガーデンアイランド北海道

# 1. 概要

円山公園は、1908（明治41）年に札幌市が当時、造園の権威であった東京市技師の長岡安平に公園設計を委嘱し、1909（明治42）年にサウ・オハボダグジュ・ソメイシ・ラカシヨ等の植樹・芝生の整備を行ない公園が開設されました。2009年は、その着工から、数えて100年の節目にあたります。この節目を契機に、公園ウォッチングやシンポジウムを行い、これまで円山公園の果たして来た役割やこれからの未来像を、専門家と市民の方を交えて情報交換を行い、議論を発信していきたいと思ひます。

## 第1部 円山公園ミニツアー

専門家の案内により円山公園をウォッチング。

（円山公園（南大通側入り口集合））

円山公園の沿革、現況植生、記念碑の由縁、施設の現状、近年の利用状況などを現地見学しながら再認識し、円山公園のあるべき姿と改善すべき課題について皆さんと考えたいと思ひます。

- ・時間：時間：10：00～12：00（受付開始 9：30）
- ・参加者：先着40名 事前に申し込みが必要です。
- ・案内人：笠 康三郎（社：日本造園学会北海道支部長）



## 第2部 「円山公園のこれまでの歩みから将来を考える」シンポジウム

円山公園が有する環境の保全と利用のあり方を考え、後世に引き継ぐために何を考え、何に取り組む必要があるのかを、円山公園の歴史的変遷を踏まえながら、多様な視点で意見交換したいと思ひます。

会場：北海道神宮参集殿（札幌市中央区宮ヶ丘474）※神宮社務所となり

時間：14：00～17：00（受付開始 13：00）

1. 挨拶および本シンポジウムの趣旨説明 14：00～14：10  
ランドスケープシンポジウム実行委員会代表 小林 昭裕 氏
2. 円山公園の沿革と現状について 14：10～14：30  
社団法人日本造園学会北海道支部長 笠 康三郎 氏
3. 基調講演 14：30～15：20 「自然にも運と不運とがある」  
北海道環境財団理事長 辻井達一先生
4. パネルディスカッション 15：20～17：00  
パネリスト ○株式会社ニットメンテナンス技術顧問 高畑 修 氏  
○札幌市円山動物園園長 酒井 裕司氏  
○NPO法人ネオス代表 高木 晴光氏  
コーディネーター 小林 昭裕氏
5. 主催者より終了の挨拶 17：00～17：05  
笠 康三郎氏（日本造園学会北海道支部長）

## 2. 円山公園の沿革と現状について 14:10~14:30

社団法人日本造園学会北海道支部長 笠 康三郎 氏

みなさんこんにちは。

午前中の2時間ほどのミニツアーに参加され、大変お疲れにも関わらず、こちらの方にもたくさんの方が参加していただきましてありがとうございます。午前中のミニツアーでは、予定人数の倍以上の70名近くの方をご案内することになり、少し声が聞き取りにくかったかもしれません。また、午後から参加された方のために、今日現地でお話しした内容を簡単に振り返りながら、円山公園周辺の歴史や現状についてご説明いたします。

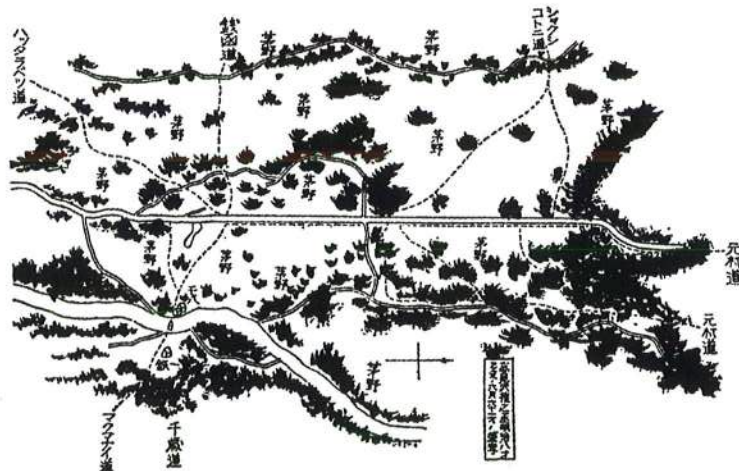


### 【札幌のなりたちと円山について】

これは明治元年の札幌の絵図で、左下を流れているのが、サッポロペツと呼ばれた現在の豊平川です。当時の札幌近郊には、既に多くの和人が入ってきていましたが、なかでも一番たくさん入植していた元村(現在東区の苗穂から元町あたり)には、大友亀太郎という人が幕府の命を受けてすでに農業を始めており、この他発寒や篠路など様々な場所に和人が入っていました。大友が、サッポロペツの支流から元村へ向けて南北に大友堀、今の創成川となる用水路を既に掘っています。また、サッポロペツの渡し守を命じられた吉田茂八と志村鉄一の2軒7名が、明治2年まで札幌の唯一の和人だったのです。

明治2年に、北海道開拓使の主席判官であった島義勇が乗り込んできました。島は、明治2年の今の暦の11月に銭函に入り、12月の初めに円山の麓にあるコタンベツの丘というところから、どのように本府を設定するかと言う構想を練りました。ここに書かれてある銭函道のつきあたりがコタンベツの丘となりますが、ここから大友堀の交点である、今の南一条の創成橋を起点にして、街割りをするという計画を立てました。

冬の間、島は建物の建設などのためにお金を多く使わざるをえなかったのですが、当時の長官からお金を浪費しすぎだということで職を解かれ、すぐに帰ってこいという指令を受けました。結局島は、わずか60数日しか札幌にいなかったのです。この時に、本府建設のあり方を示した指図書

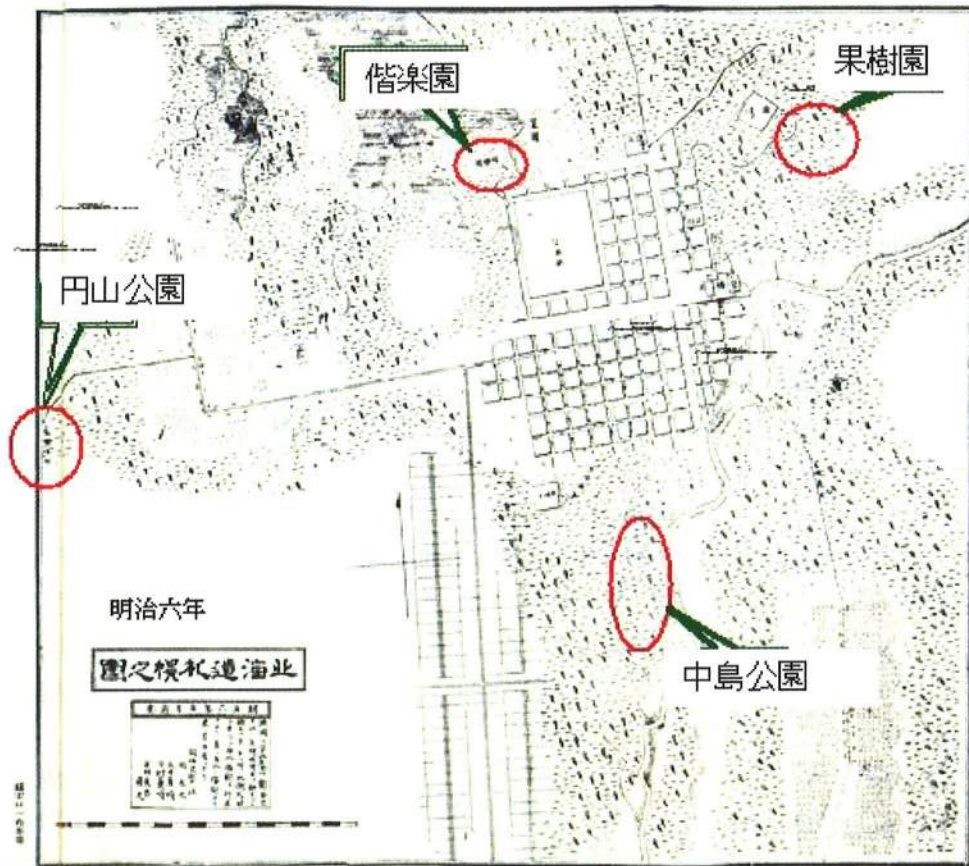


明治元年札幌地図(銭函道が大体南1条通にあたる)

を残して札幌から退去を余儀なくされましたが、札幌市民にとって札幌の基盤を作った人ということで、今なお大切に扱われているのです。開拓三神をもたらし、円山の地に札幌神社を定めたという意味合いもあって、円山公園の中に島の功績を称えた紀功碑があります。

島がいなくなった後を継いだのが、開拓判官であった岩村通俊でした。指図書とはだいぶ違うのですが、大友堀と南一条を基点に、今の条丁目になる街割りを明治4年に設定し、札幌の街の基盤を作りました。これが岩村の功績です。

これは明治6年の札幌の地図ですが、岩村はすでにこの時に、街の北側にあった今の清華亭の一带を偕楽園、いわゆる公園として設定しました。岩村は、明治4年には円山に札幌神社の社殿を建て、ここに参道ができていますが、この一带も公園にし、北の偕楽園、西の円山、南の中島、東の苗穂のあたりにもう一つと、街を取り囲むような公園の配置構想を持っていたとされています。



▲ 1. 北海道札幌之図(明治6年) 北道札幌之図(明治6年) 明治6年

### 【円山公園とは？】

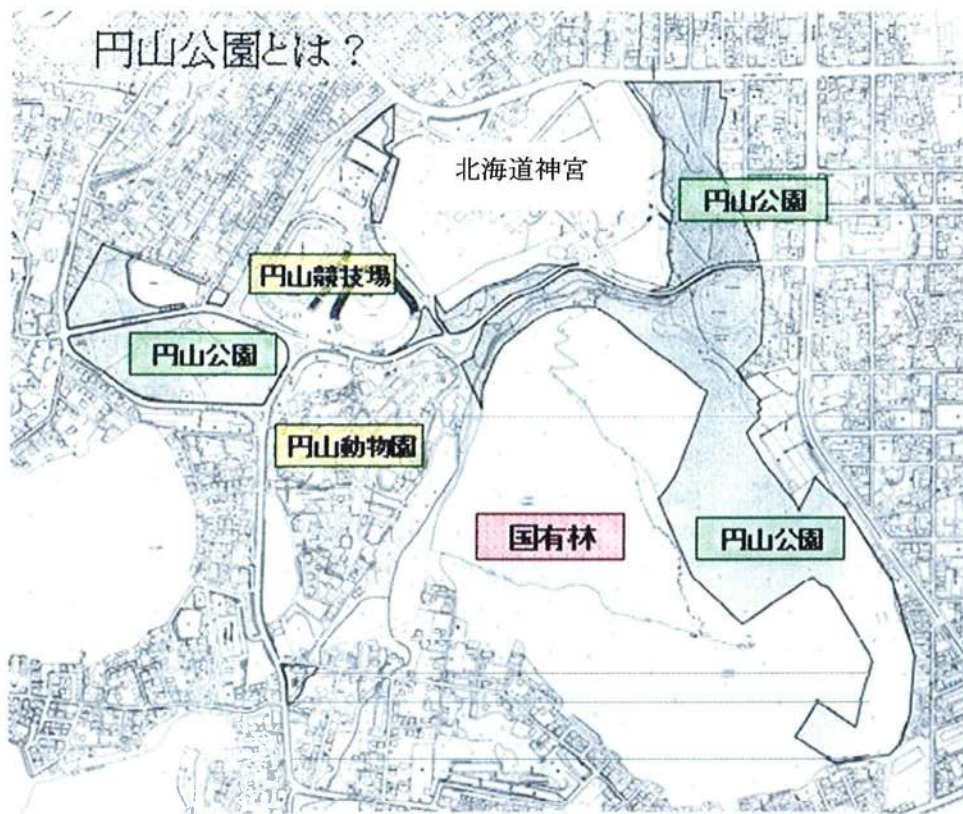
その後、明治41年に東京市の技師であった長岡安平に公園設計を依頼して、北海道神宮も含んだ今の公園と同じ形で設計され、一定の整備が終わってから今年でちょうど100年になります。

ただこの図面は、我々が見ますと今の動物園と総合グラウンドを合わせたところに競技場と書いてあります。多分この人は現場を見ないで図面を書いたに違いありません(笑)。この図面の通りにはもちろんなりませんでしたが、このあたりの園地整備はこれを意識したのではないかと

考えられています。

私がいつも言っている通り、北海道神宮は公園ではありませんが、円山競技場と円山動物園はあくまで円山公園という都市公園の中の施設です。円山公園のパンフレットでは、これらが着色されていない上に、円山は緑色に着色されて公園の一部のようになっていますが、ここは国有林ですから、本当は塗ってはいけない場所です。

そもそもどこを円山と指すのか、ということが皆さん曖昧であることと思います。我々はこれ全体を円山と認識していますが、北海道神宮はともかくも、この黄色く示されている動物園や競技場も、上の方のユースの森といわれる場所も円山公園の区域となっています。また円山の、街に面している部分は国有林ではなく札幌市の市有地であり、円山公園の一部として札幌市が管理しています。これは全くの原始林ではなくて、カラマツやニセアカシアなどが混じっている場所になっています。というわけで、我々の円山公園周辺に対する認識を変えていかなければなりません。



#### 【円山とサクラについて】

札幌神社周辺の植樹の記録が残っており、明治4年に社殿ができた後、すぐに明治5年から8年には、いわゆる献木という形で社殿あるいは参道の周りにスギ、サワラ、トドマツ、ドイツトウヒ、ヨーロッパクロマツ、ヨーロッパアカマツなどたくさんの木が植えられました。

この中で特筆されるのは、エゾヤマザクラです。島は開拓使をクビになった後、侍従や秋田県の知事をしていましたが、佐賀の乱で江藤新平と共に明治政府と一戦を交え、明治7年には捕ま

えられてすぐに斬首さらし首にされてしまいました。島の道案内をした、当時発寒にいた福玉仙吉という人が、それを悼んで参道に近くの間から集めてきたサクラの苗木を植えましたが、それが円山のサクラの起源になったのです。今のサクラはもちろん何代も後のサクラですが、明治32年の絵図を見ても、今と変わらない花見の情景が明治のころから見られているのが分かります。

これは今年の円山公園の様子ですが、今年の春先は非常に寒く、ゴールデンウィークに花が全く無い中でもたくさんの方がジンギスカンをやっているという状況です。花が咲こうが咲かまいが、円山で花見をして春を迎えるという意識が、今でも札幌市民に非常に強く残っています。

### 【円山養樹園について】

もう一つ円山について考えるときに非常に重要なことは、明治13年に今の坂下グラウンドを中心として、円山養樹園という、今の林業試験場のような形の施設を作ったことです。ここでは、世界中、あるいは日本中からヒノキ、カラマツ、クリ、ウルシ、カツラ、アカマツ、イチョウ、ニセアカシア、スギ、ヨーロッパクロマツなどのタネを集めて苗木を作り、それを全道に配る施設でした。

動物園の中で10年くらい前に枯れたスギの幹の円盤を作り、年輪を数えてみると110本あったことから、明治23年頃に植えられたものではないかと推測していました。ところが、去年俵先生からいただいた養樹園の植栽図を見ると、このスギは明治23年に植えたという記録がしっかり残っていて大変驚きました。公園内には、その時に植えたスギ、カラマツ、サワラなどが今でも残っていますが、坂下グラウンドの上あたりには、ユリノキやヒッコリー、ストロブマツ、サワ



グルミなどの大木が点在しています。その中に、樹種の全く分からない大木が1本ありました。今年落ちてきた枝を拾ってもらって、樹木名が初めて分かったのですが、ブラックチェリーという、アメリカの穂咲きのサクラの木であることが判明したのです。このような大変珍しい樹木が園内にあるということをもっと知ってほしいと思っています。

貴重な歴史的な景観資源を残すために、『札幌景観資産』というものを都市景観条例で定めています。それにテレビ塔の横にあるノルニレが、去年の春に初めての樹木として指定されました。これは豊平館がここにあった時の前庭にあった木で、今でも昔の姿のままの形で残っています。札幌の一番由緒正しくて、しかも景観的に素晴らしい木なので、第一号の樹木として指定したのですが、裏参道に今も残るヨーロッパクロマツなど、貴重な樹木をどんどん指定して残してほしいとお願いをしています。こういった由緒ある歴史的な景観を持つ樹木が、この場所にあるということをもっと是非とも知っておいただきたいと思っています。

### 【円山原始林について】

天然記念物に指定されている円山原始林があります。宮部金吾、その弟子である館脇操といった植物学者が、円山と藻岩の原始林を守ってきました。カツラの巨木に代表される歴史のある自然の宝庫がこんな街の中にある



円山原始林の主と言えるカツラの巨木

という、とても貴重な空間でもあります。

ただ、ここも6年前の台風の時には、先程のカツラを含めて多くの木の枝が折れたり、倒れてしまいました。その後に急速に増えてきたのが、特定外来生物に指定されているオオハンゴンソウです。これが円山公園内に増えてきているので、円山公園管理事務所や動物園では特定外来生物を駆除するための許可

を環境省に申請し、たくさんのボランティアの参加によって抜き取りを実施してきています。

### 【外来生物の影響】

これは、たまたま動物園の中で2年前に見つかったガーリックマスタードという植物ですが、この根には強烈な生育阻害物質を持っています。既にアメリカの国立公園内では、この植物の侵入によって野生植物に深刻な被害が出ているという報告を見つけ、このような危険な植物が円山原始林に侵入しないよう、昨年からは動物園の中でボランティアの方が一生懸命抜き取りをしています。



密生するガーリックマスタード

このほか、神宮の梅林の中ではワルナスビという植物が確認されています。牧野富太郎が自分の庭に植えたところひどい目にあい、こんなにタチの悪い植物はないということでワルナスビという名前をつけたということです。これは道内ではまだ2箇所で見つかりおられません。おそらく梅の苗木を本州から入れた時にくっついてきたと考えられていますが、これが梅林内にはびこっています。「キレイだね」なんて、持ち帰って増やしたらとんでもない目に遭う危険性があります。

シンジュやスギ、ブナ、トチノキなど、本来円山に自生していない樹木の稚苗が、原始林との境界付近などあちこちに生えてきており、これらも円山にとっては外来生物なので、非常に危険な状態にあるといえます。

### 【過密植栽の影響】

表参道(北一条通)の、おそらく明治の終わりから大正ころと考えられる写真がありましたが、円山公園はほとんど木がなく、スカスカだったのがよくわかります。昔の公園管理では、とにかくすき間があればせつせと苗木を植えていくことが当たり前に行われていましたが、その木が生長してくるに連れ、だんだんお互いがぶつかり合ってきてし



過密な林分の管理

まいます。スギ林もそうですが、枯れたら大変だということで後継樹をどんどん補植をして、現在の超過密状態になってしまいました。こういった樹木を適切に管理するためには、当然間引きなども行わなければなりません。貴重な自然だということで、木を切るのはとんでもないという意見も多く聞かれますが、冷静な議論をしなければならない時期に来ています。

### 【アクセスの改善は急務】

地下鉄から円山公園を通過して動物園へ行こうとした時に、ここの交差点の表示を見るとまっすぐ行くと動物園と書いてありますが、その先はこんな狭い歩道になってしまいます。一人一人すれ違うこともぎりぎり、ちょっとここから落ちると途端に轢かれそうになり非常に危ない場所です。といて、ここにある横断歩道を渡ろうとすると、カーブがすぐ先にあるために見通しが大変悪く、非常に危険な状態で横断歩道を渡らなければなりません。



貧弱でとても危険な動物園へのアクセス

円山動物園の入場者数は一時 50 万人程まで落ち込みましたが、今は 80 万人まで増えています。これをもっと増やして 100 万人、120 万人へ向けて、職員一同一生懸命頑張っていますが、それを達成するためにはアクセスが大問題です。冬には除雪もしない状況で、観光客や外国人もよくあそこまで歩いて行っているなともいつも思っています。そもそも裏参道という道路は本当に必要なのか、これを歩行者専用道路にするべきじゃないかという意見はかなり昔からありました。道路を管理する部局をはじめ、公園、動物園、競技場などそれぞれの担当部局がしっかりと連携をとって、早急に改善策を立ててほしいと思っています。



### 3. 基調講演 「自然にも運と不運とがある」 14:30

～15:20

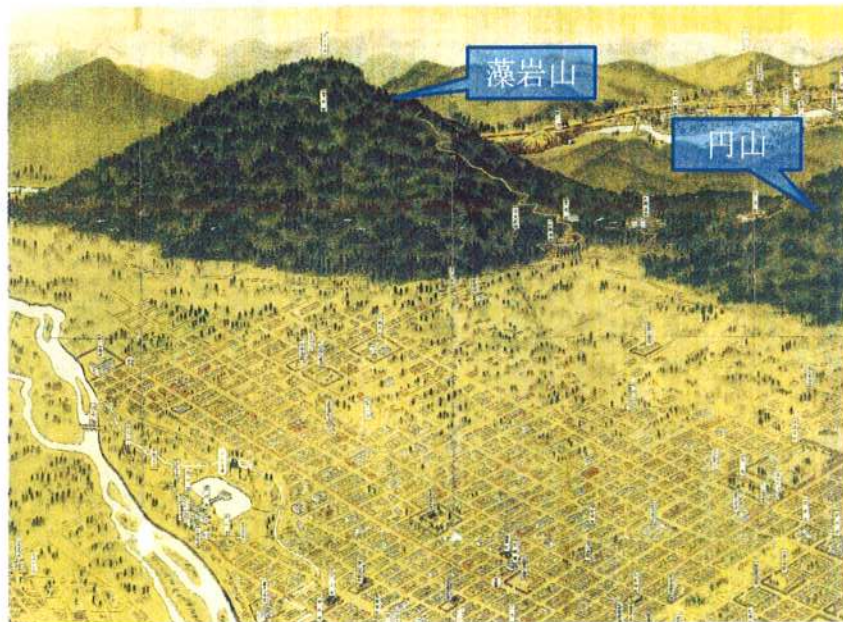
北海道環境財団理事長 辻井達一先生

みなさんこんにちは。ただ今ご紹介いただいた辻井でございます。  
自然にも運と不運とがあるという少し妙なテーマを掲げました。  
運と不運というのをどのように解釈するかによって見方、判断が異なります。人によっても、あることに對し運がいいと考える人もいれば、他の人あるいは自然にとっては不運だと解釈されることがあるかもしれません。



今回シンポジウムのテーマである円山は、私はどちらかといえば、運のいい自然に属するのではないかと考えています。というのは例えば、先ほど笠さんからお話がありましたが、円山は形も悪くなく、明治の初めに札幌の西の一つの目印になりました。また、京都や奈良のような碁盤の目に区切りましたが、その京都の西にある円山になぞらえて名が与えられました。北の都という意味でこのような考え方を起こしたという話ですから、由緒ある名前だと言った方がいいかもしれません。運がいいといえる理由の一つになると思います。

午前中のミニツアーで笠さんが説明して下さいましたが、円山の前の名前は「モイワ」でした。今の藻岩山は、遠くを見渡す場所だということで「インカルシペ」と言う名前でしたが、現在の藻岩山を「モイワ」と呼ぶことにしてしまいました。モ・イワというのは小さい山という意味ですので、藻岩山にとっては心外な呼び名を付けられたのかもしれませんが。こういったことで、自分の名前、小さな山というのを藻岩山に押し付けて、円山と呼ばれるようになったという面白い謂れがありますが、これは名前ですからまだいいだろうと思います。というのは、旧名はわかっているわけですから、藻岩にしてみれば「インカルシペ」という名前が前は付けられていたという説明があれば、昔はそう呼ばれていたのかとわかりますし、最近では地名もアイヌ名を並べて書いた方がいいという話もありますから、そうすれば昔の呼び名、「インカルシペ」というのが残るわけです。



名前だけではなく、実際の自然にも運と不運があり、扱いが全く変わってしまったという例がいくつもあります。例えば、この札幌の近くですが、幌向という場所があります。これは駅の名前としては残ってい

て、岩見沢の少し手前のところに、幌向駅があります。元々、幌向は大きな湿原があった場所で、幌向湿原と言い、植物学的には有名なところですが、幌向という名前を頭につけた植物は7種類あります。

土地の名前を植物の名前につけるといのは、たくさんあります。例えば、藻岩にもあってモイワズナやモイワシャジンなどがそうです。富士山のフジアザミや立山のタテヤマリンドウなどもその例です。また、京都の近くに伊吹山という山がありますが、これは地質的に特徴的なこともあって、イブキの名前がつくものがたくさんあります。例えば、イブキジャコウソウ、イブキトラノオなどです。このように地名がつけられているものはたくさんありますが、大抵は何か特徴的な、目立つような山や地質を持つ場所が多いです。しかし、幌向には特別目立つような山やきれいな湖があるわけでもありません。このようなところの地名が7つもの植物名に使われることは滅多になく、植物もしくは幌向にとっては運がいいと思います。

しかし、幌向原野はどんどん開発されてしまい、泥炭地が改良されて、農地になりました。泥炭地が改良された結果、幌向原野、幌向湿原というのは全くその跡を残しておりません。現在、幌向は南幌町という名前になっております。その南幌町では、この状況はあんまりだということで、昔からあった植物に名前が残っている場所なのだから、また原野を元に戻すことはできないにしても、幌向原野はこういう場所だったとわかるようにしたい、昔を思い出せるようにしたい、名前がついた植物はここから出たのだというのがわかるように、少し増やしたいといった動きが起こりつつあります。

せっかくだしい湿原の植物の研究できる日本でも有数の場所であった幌向は開発、開拓により湿原そのものが全く知られなくなり、植物も当然知られていません。運と不運があると考え、このことは不運だったと思います。

その一つの例として、ホロムイイチゴというのは高さが15cmくらいの小さなイチゴです。日本ではあまり知られておりませんが、北ヨーロッパでは結構その実を食べられていて、なかなか洒落たジャムになります。そういったことを取り組んでみてはどうかと南幌町の人に言ったところ、それをやってみようかということで動き始めました。

植物にとっては一度運が悪くなったわけですがけれども、今、上向き始めていることになっていると考えられます。植物や自然にも運と不運があるという一つの例として幌向を持ち出しました。



そこで、では円山はどうかというと、先程申しあげたように、円山はわりと運がいいと思います。いい名前をもらった。アイヌ名は消えてしまったわけですが、それも現在の藻岩山に押し付けて、名前としては残っている。そういった意味では、運が良かったと考えてもいいと思います。

もう一つ運がいいというのは、そのずっと後になりますが、藻岩山と並んで、非常に植物、殊に木の種類が多いところとして植物学者が注目しました。明治の初めに札幌の街が整えられたときに中心だったものの一つが、今の北海道大学である札幌農学校です。その初代の植物園長を務めたのが宮部金吾さんという人です。ちょうど私が大学に入ったときに、宮部先生が亡くなり

ましたので、官部先生から直接お教えを受けるチャンスは無かったのですが、私は言ってみれば孫弟子にあたるということになります。官部金吾先生は若いときにアメリカに留学していてハーバード大学の植物園で研究をされていて、その後札幌に戻ってきて農学校の教授になりました。官部先生が藻岩と円山を研究なさって、小さい山にもかかわらず非常に樹木の種類が多いということに気付いて、ハーバード大学で教わったアーノルド樹木園の園長だったサージェントという人に相談をして、見てくれということで招待しました。サージェントさんは円山と藻岩山を見て木の種類が非常に多いことに大きく感心しました。

これは天然記念物調査報告にあったものをコピーしたものです。あまり良く見えないかもしれませんが、真ん中に人が立っており、結構大きな木です。今日の午前中に参加なさった方がご覧になった円山のカツラの木に匹敵するくらい大きな木です。しかも、藻岩のカツラですが、真ん中が抜けておらず、直径にして約6mと立派に大きいものです。6mの木というのは滅多にあるものではないのですが、こういったものが存在しました。

今日午前中に一緒に見た円山のカツラにサージェント先生は大いに感心しました。その理由は2つあって、こんなに大きな木は滅多にないことと、カツラはほとんど日本特産ですから非常に珍しく思ったということです。葉の形もきれいで、その点からも素晴らしい木だと考えたと思います。藻岩にももちろんたくさんありましたが、円山にも同じようにカツラがたくさんありました。このことから、藻岩と円山共に植物学的に優れた場所であるので大事にした方がいいという話が元になって、藻岩も円山も原始林として天然記念物になりました。このような歴史をもっております。



円山のカツラ

明治の最初の頃に2人の植物学者が、滅多にこれだけの種類を持つ山はあるものではないとお墨付きを与えました。また、先程の幌向のことを申し上げますと、研究の対象として、殊に湿原の植物の研究の場所としては非常にいいところでした。しかし、不幸にして天然記念物には指定されませんでした。指定されていれば残っているはずだったのですが、今では全部開拓してなくなってしまいました。このような意味合いも含めて、円山藻岩というのは運のいい方なのだと思います。

今回は円山がテーマですから、円山に集中いたしますと、円山にはカツラの他にもたくさんの植物が生育しております。円山がどのような歴史を辿ったかと言うと、先ほどサージェント博士が明治時代にお墨付きを与え、大



図 11 7 3

景 近ノ 林 生 原 山 圓 版 四 十 二 第

正 15 年に天然記念物に指定された後に、1928 年（昭和 3 年）に宮部金吾教授後任の舘脇教授が円山の徹底的な植物の調査を行っています。その舘脇先生に私は教わったわけですが、そのときに植物標本をほぼ完璧に集めました。この写真は円山原生林の天然記念物になったときのものです。場所は、現在の六花亭のあたりで撮っている写真ではないかと思えます。

そして、その後、舘脇教授（当時、助教授）が円山の植物を調べた時に出したものが、昭和 3 年 5、6 月に北海道林業学会会報に、「円山植物」と言う名前で報告をまとめたものです。そこに円山植物目録と言うのがあって、そこに非常に細かく植物を記録しています。その 30 年後の昭和 33 年に、「札幌円山の自然科学的研究」という論文を出しています。この時は、私も学生でしたからいそいそと手伝いました。

実は、いつどこから入手したかわからないのですが、これは円山公園入口から円山原始林の樹木というコピーです。これは、誰かからもらったのですけれども、誰からもらったか誰が作ったのかどういふもののコピーなのか全くわかりません。比較的近年にもらっているのですが、実は私はさっぱりわからない。さっき笠さんに見せて後で調べてみようということになりました。

というわけで、円山の方は比較的よく調べられ、しかも植物標本もほぼ完璧に作られて、藻岩もそうですが、北大農学部の植物標本庫にきちんと収められています。再々引き合いに出しますが、幌向原野の方はたくさん論文が書かれておりますが、標本や植物目録といったリストが完璧にはできておりません。少しずつ削られるように農地になってきたので、全体をまとめるところまでいかなかったことがその原因です。これらのことが円山の運のいいスタートを切って、しかも後々まで大事にされてきたと考えていいということになります。さて、ここまではどういふところなのかという、きちんと調べたか調べて無かったかと言う話と、その過程でいかに円山、藻岩山も含めて、色々な植物の種類が多いところだということが次第に調べられてきたという話でした。

次に、円山に加わった植物と加えられた植物ということをお話したいと思えます。

笠さんの話にあったように円山は公園として次第に整備されてきたこともあり、色々な植物が入れられます。例えば、アメリカのアカナラと呼ばれているものやヨーロッパのロイヤル・オークと呼ばれているイギリスのナラ、マツの仲間と言うと、ヨーロッパアカマツ、ヨーロッパクロマツなど。また、本州からはなど色々なものが入ってきました。この導入された種にも偏りがあります。

というのは、札幌養樹園、つまり昔の林業試験場ですけれども、役に立つようなものを集める、導入するという傾向にありました。アカマツ、クロマツ、カラマツ、ウルシ、ニセアカシアなどもそうです。試験的に北海道、札幌で育つかどうかのためにウルシやカヤ、ハゼ（サンシュハゼ）、クリ、ブナなどを、繰り返して試していきます。こういった種類を見ま



すと、当時の人たちは、本州や四国、九州の樹種に思い入れがあったのではないかと考えられます。本州以南からの出身の人にとっては、そういったものを見たい、日ごろ見ていた樹種を札幌でも植えてみたいという思い入れが非常に大きかったのではないのでしょうか。ウルシやハゼは明らかにそういったものです。しかし、そうそうみんなうまく育つかと言うとそういうわけではありません。結局のところ、残ったのは本州のもので言えばカラマツ、海外からのものはニセアカシアくらいです。公園や並木に使われている種類もありますが、そう多くはありませんでした。

円山養樹園というのは明治34年に廃止されて、旭川の界限に移されました。

それから、近年の笠さんのお調べによって、ガーリックマスタードというものも入っていることもわかりました。マスタードと言うからには嘔むと辛いのですが、これはいわゆる雑草です。円山公園の動物園の脇にたくさん生えているのが見つかっています。また、笠さんの話には出てきませんでしたが、私がほとんど同じような場所で見つけて、植物園に今もう植えてあるエゾヘビイチゴ (*Fragaria vesca*) という植物があります。これは、いかにも北海道の植物のように聞こえますが、ヨーロッパからシベリアあたりまでに分布するクサイチゴの仲間、立派に食べられます。どうやら持ち込まれたのは、ロシア革命により帝政ロシアが倒れたことで白系ロシアと呼ばれた人たちが特に函館に最初に多く入ってきたらしく、彼らが持ってきたとされるのが大沼にも生えています。そして、エゾヘビイチゴが生育しているもう1箇所が円山なのです。でも今はまず見つからないと思います。いつ見つけたかは覚えていませんが、そこで見つけて植物園に持ち帰りました。これは少し面白いイチゴで、完全に熟しても赤くならず白っぽいクリーム色がかった色になります。

植物園の草本分科園にありますから、季節は過ぎましたから、もう実はありませんけれども、もし来年覚えていらっしゃったらご覧になってください。たいていの人はまだ白いままですからおいしくないと思って食べないのですが、ちゃんと食べられ、知っている人しか食べないわけです。白いまま熟するので、うまく集めて煮れば白いジャムができます。以前、或るお菓子屋さんにもその話をしたら、赤いジャムは前からあるわけだから、白いジャムを作れば紅白で面白いかもしれないと話していました。



神社山の南西斜面

そこで、まとめの話になりますが、円山の奥に神社山があります。これはさっきの笠さんの最初の写真に、北海道神宮の正面の斜面をまっすぐ見える写真が出ていました。その正面に見えるのが神社山と呼ばれるところです。そこでこの北海道神宮の奥之院になるわけで神社山と呼ばれるわけです。実は私は神社山のふもとに住んでいますが、ほとんど山に登る道がありません。無理矢理登れると言え

ば登れますが、ちゃんとした道はありません。そこは、ほとんど植物学的な調査は行われていないと思いますが、おそらく円山とほぼ同じ種類の植物が残っているのではないかと思います。少し歩いてみてほしいそんな感じがします。

私のうちから写真を撮りましたが、これが神社山です。わかりづらいですが、山のカーブの調子が円山とほとんど同じで、おそらく似たような植物構成が見られるのではないかと思います。それから、この山続きになりますが、三角山もあります。このように、藻岩、円山、神社山、大倉山、そして三角山と似たような山が山として連なっているところになります。また、ここのすぐ下の所に、現在ユースホステルはなくなりましたが、宮の森のユースホステルの森というものがあります。みなさんの中にもご存知の方が多いと思います。そこは、カラマツが植えてあったりして、自然林ではないがいかにも、林床（林の下）の植物は昔こうだったのではないかという感じのものが多いです。例えば、ハンナラとキバナノアマナやエゾエンゴサクなどの春の花が咲きますし、その後はエンレイソウ、オオバナノエンレイソウなどが続き、その後オオハナウドがたくさん咲き、オオウバユリが咲いて…というようにこの辺の低山の趣がよく見られます。言ってみれば円山のふもとのような光景がかなりの面積で見られるのが、宮の森、昔のユースホステルの森になります。

円山は、一体今後どうなるのか、方向性がはっきり決まっているわけではありませんが、お話しした円山天然記念物も放っておけば色んなものが入ってきて様子が変わるかもしれません。例えば、円山の木が何かの弾みで倒れたりしますと隙間ができます。すると、その隙間に明るい所が好きなニセアカシアの種がいつのまにか飛んできて、ニセアカシアの林を作ってしまうといったことも考えられ、このようなことはよくあります。環状通のところから行きますと、先ほど昔の天然記念物に指定当時の写真がありました。現在の六花亭のところから見ますと、春先6月頃になると、ニセアカシアの林じゃないかと思うくらいニセアカシアの花がたくさん咲いています。これらは取ってしまうべきだと思うのですが、なかなかそうもいきません。天然記念物法と言うのは非常に厄介で、保護のために決まっているわけですが、ニセアカシアのようなものでも現に生育しているものとなると、それを勝手に切ることは出来ないのです。ちゃんと文化庁に届けて現状変更の許可をもらわなくてはならず、しかも、重機は使えません。全部手で切って、人間が運び出さなきゃいけず、機械を中に入れるわけにもいかない。このような面倒な手続きが必要になります。このこともあって、たぶん札幌市もメインの部分には国有林になりますが、国有林も面倒くさくて手間もかかるので、なかなか手を下ろしません。これからは、そういったものを少し手間がかかっても手入れをしなくてはならず、天然記念物の手入れというのも妙な言い方なのですが、こういったことも必要なんじゃないかと私は思います。

それからもうひとつは、私としては、放っておいてもいろいろな植物が勝手に入ってくるのはなかなか止められませんから、そのようなものについても監視を必要とするでしょうし、適宜排除するなら排除するというをやらなければならないと思います。

もっと根本的なのは、円山を含めた円山公園をもっと使えるように、あるいは使うようにすべきではないかということです。例えば、お花見のときだけみんなで集まってがやがややるだけでなく、私の感覚で言えば養樹園以来全体を通して一種の植物園として利用してもいいと思います。自然林もありますし、植えたスギ林もありますし、色々な外国樹種もその時々に応じて入れ

ていますし、結構面白いものが存在します。先ほど申し上げたエゾヘビイチゴのような思いもかけないものもあります。名乗ってはいませんが、一種の植物園的なエリアとして、もっと我々は楽しんでいいのではないかと思います。その為には、先程申し上げたようにある程度の提言も必要です。その為には、どこ歩いても公園は自由ですが、面白く歩くためのある種のフットパスのようなこういう風に歩くと面白いですよと言ったガイドマップのようなものがあると、もっといいのではないのでしょうか。今日笠さんに案内してもらったルートを真似するというのもいいと思います。自然と言うのは、そのまま残しておくというのが一番いいわけですが、例えば大雪山の頂上のような元々の自然と、都市に隣接すると言うか都市そのものの中の自然とでは扱いが異なるべきではないのでしょうか。余計な手入れではなくしかるべき手入れをしながらいつまでも楽しめるようにする事が必要なのではないかと一言申し上げて、私の円山の紹介を終えることにいたします。どうもありがとうございました。

---

辻井先生、どうもありがとうございました。

続きまして、パネルディスカッションに入りますが、準備のために休憩時間に移りたいと思います。

## 4. パネルディスカッション 15:20~17:00

パネリスト ○株式会社ニットメンテナンス技術顧問 高畑 修 氏  
○札幌市円山動物園園長 酒井 裕司氏  
○NPO法人ネオス代表 高木 晴光氏  
コーディネーター 小林 昭裕氏

### ■司会(大塚さん)

パネルディスカッションを始めたいと思います。パネルディスカッションは、小林事務局長の小林の方でコーディネーターを務めさせていただきます。では、よろしくお願ひします。



### ■小林さん

それでは、これからパネルディスカッションを始めたいと思います。お手元の資料をまず確認頂きたいと思います。先程、笠さんの方から円山公園の計画と現状についてという資料があったかと思ひます。その後に基調講演をして頂きました辻井先生のお話の後に、今日お呼びしています3名のパネリストの方がお話しされる内容が書いてございます。事前にお三方のパネリストの方と打ち合せをしたところ、だいたいこれに沿った話をされるということでしたが、少し話を膨らませてお話を頂けると伺っておりますので、そのような方向で進めさせて頂きたいと思っております。



最初は株式会社ニットメンテナンスの技術顧問である高畑さんの方から「私と円山公園の木の思い出」ということでお話を頂きたいと思ひます。高畑さんよろしくお願ひします。

### ■高畑さん



高畑です。午前中のミニツアーガイド、また先ほど笠さんが説明されたお話を聞きましたら、実は私この仕事に携わっていて、現在みなさんのお手元に書いてあることが少し恥ずかしい思いをするようなことがいくつかあり、その話が出てまいりました。例えばこれからお話し致しますが、実は円山公園に色々な木を植え、また管理をし、そんなことを45年くらい前から何年間か携わって参りました。そんなことを思いながら先程のガイドを聞いておりました。円山公園に対しての非常に強い思い入れがありまして、先程先生方から色々な木があるというお話がありましたが、その中でも私の好きな木はサクラの前に淡いピンク色の新芽を出すカツラの木です、公園の入り口から神宮に入る通路にある大木は特にお気に入りの木です。そんな思い出をある人と話していたら、このたびのシンポジウムで円山の木の思い出を何か話して欲しいというお話を頂き、今日この場に参りました。私は昭和42年に札幌市役所に入りましたが、その頃札幌の街並は区画されていましたが、まだ歩車道がきちんとしていない箇所や、道路の舗装が成されていなくてない所が多かったように記憶しております。そんな中で、お話に出ましたニセアカシア、プラタナス、ナナカマド、シラネアオイなど、一般的にみなさんが知っているような、安価で成長が早い木が植えられてきました。それが街並の形成に繋がるとか、そういうような状況ではなく、ここにも先輩

がいっぱいありますけども、とにかく札幌の街に木を植えよう、数をたくさん増やそうという時代でありました。



そんな中で公園の中の状態はと言いますと、当時大きな公園、中島、円山、藻南、月寒のように、園内に自然林が残されているような状態でありましたが、実は札幌では大きな公園でも木が少なく、木を増やす為に公園内に圃場というものを設けて、そこで木を生産しておりました。そんな中で私が昭和45年、最初に管理の仕事についたのがこの円山公園でした。先程からお話にありました、養

樹園というところで苗木の栽培地として色々な形でここに沢山の樹種が植えられていたこと名残でないかと思いますが、笠さんの案内にもありました坂下グラウンドの周辺にはその当時植えられていたものが大きく成長しています。その辺りが当時の養樹園の感じが残っていた気がします。先程、私が沢山の木を植えたというお話を致しましたが、当時、まだ木があるような円山公園でした。そんな中で各公園から色々な形で育てられた木を円山公園にとこと構わず植えたというのが先程説明した話に繋がります。道庁前のアカナラの苗は藻南公園で育てたものを持ってきています。円山公園ではスギ林のスギの苗を採っては、現在の管理事務所の向側で、当時スギ林の圃場として管理していました。それらは管理する人達が雨の日に通常の仕事ができないときに苗木を育成していました、円山公園の杉は北限地といわれ貴重な杉と認識して育てていました。先程、笠さんが言われたスギ林が過密になっているという事を、今、私は考えて反省していますが、間伐の記憶がありません。それから採ってきた苗が1メートルくらいまで育つと現場の職員の人が「もうこれは植えていいな」ということで今の散策路のある周辺に育種した苗を植えていました。それから円山の北1条通りから裏参道までの通路(昔は車道になっていた)に植えられて、今は並木になっていますゴヨウマツですが、クロマツ林を遮断するという事で当初垣根にする予定でした。ところが当時、管理になかなか手が回らない状態で、芯がそのまま残り並木になってしまいました。それから笠さんの先程の説明の中に北1条通りの古い昔の写真がありましたが、昭和42年にあそこにオンコの木が並木とし植えてありましたオンコの木は道路の拡幅に併せて円山公園の池の周辺などに移植(私の最初の監督業務)しました、それが45年経つと大きく成長しました。当時植えた木で、特に大きく育ったのはアカナラです。これは非常に成長が速いと思っています。



話として盛んに出てまいりました北海道神宮と円山のサクラですが、当時から円山の花見客が沢山いて賑やかな花見でした。実は昭和40年の前半、サクラの木はあまり多くなかったと記憶しています、サクラの木を増やそうと円山と神宮と一緒に植えましょうと北海道神宮の前田宮司さんと話をしてサクラの木を植えたのが、40年経過するとかなりの数と大きくなりました。最近では違うかたち(記念植樹)で植えられています。しかし円山公園のサクラの周辺には成長の速いが木たくさん育ってしまっていて、そのためにサクラが大きく育つような環境になっていないとい